

Vie Cent ● 編集長対談

素敵に生きる

SUTEKI LIFE¹⁹

絵を描いて暮らす
花と語り、虫と遊び、

「みつばちマーヤの冒険」や「ファール昆虫記」など、色彩豊かで緻密な昆虫や花の作品を数多く制作し、生物画家としてその世界を確立している熊田千佳慕さん。「日本のフチ・ファール」と異名をとり、97歳の今も毎日、虫や花と遊び、筆を握っている。小さな命に語りかけるやさしい眼は、限りなく澄んでいた。

画家

くま だ ち か ほ
熊田千佳慕さん



制作は、命続く限り 「ファールブル昆虫記」の ライフワークである



左「ファールブル昆虫記」
〔文・古川晴男/絵・熊田千佳喜/刊・世界文化社〕

右「みつばちマーヤの冒険」
〔原作・ワンデルボンゼルス/絵・熊田千佳喜/刊・小学館〕

くまだ ちかほ ● 画家。1911年横浜市南区出身。神奈川県在住。1934年東京美術学校（現・東京芸術大学）卒業後、山名文夫に師事。デザイナー・写真家集団「日本工房」に入社。土門幸らと仕事をする。戦後、縮写術技法を会得し、以後「ファールブル昆虫記」「みつばちマーヤの冒険」「みじの国のアリス」の挿画や絵本など、生命感あふれるすぐれた作品をおおく発表。ポロニー国際絵本原画展入選をはじめ多数受賞。すぐれた観察力と卓越した描写力で多くの画家を驚かし、フランスでも「プチ・ファールブル」と称賛される。横浜文化賞、神奈川県文化賞受賞。



藤本 「ヴィサン」では長い間、連載でお世話になりました。今日は読者のリクエストもあって、おじやました。よろしくお願ひします。

熊田 創刊時から描いていましたからね。当時、横浜の高島屋で個展を開いたのですが、そのときは、たくさんの方が見に来てくださってね。

藤本 近々の個展のご予定はありますか。

熊田 来年は高島屋を起点に全国を回ります。最後は銀座の松屋です。

藤本 読者の皆さんも、喜んで足を運ばれると思いますよ。先生は絵をお描きになって、何年になりますか。

熊田 幼稚園の頃からなので、90年以上。ずっと続けてきたことだけが誇りです。ほくから「描くこと」を取ってしまつたら、何も残りません。今も毎日描いているし、一生、絵を

描き続けたいと思っています。

藤本 「ファールブル昆虫記」のシリーズを描いていらつしやるそうですね。

熊田 実際の「ファールブル昆虫記」の中から100匹の虫を選び、描いています。今や60枚が完成したところ。あと40枚もあるから、のんびりはしていられません。

藤本 一枚の絵を描くのに、どのくらいの時間がかかるのですか。

熊田 年に3枚ですね。80歳になつて、それまで全然見えなかったものがどんどん見えるようになってきました。70歳のときはツルツルの葉っぱを描いていましたが、よく見た

ヴィサン編集長 藤本裕子

（ふじもと ゆうこ）

株式会社トランタンネットワーク新聞社代表
1956年福岡県出身。横浜市在住。19年間、母親の業績らしさを伝える「お母さん業界新聞」の発行ほか、さまざまな子育て支援事業を展開。「ヴィサン」100号より編集長に就任。情報発信やネットワークづくりの傍ら、地域・教育・子育て・生きがいなど、多彩なテーマで講演。「お母さん大学」を立ち上げ、全国展開中。
<http://www.30dens.com>



ら凸凹があることがわかったんです。虫の羽根にも凹凸や模様がある。それを細かく描き始めたら、とんでもなく時間がかかってしまっただ。

藤本 視力は大丈夫ですか。

熊田 耳もよく聞こえるし、眼鏡をかけることもありません。きつと神様が、もう先がないから、もつとよく見ろって言っているんでしょね。

藤本 ごほうびがかもしれせんね。

熊田 見るのではなく、見つめて、見極めるといふことを、神様が教えてくださった。だから、この目を通して描いた絵は、神様へのレポートだと思っています。

藤本 描いた絵は、絶対に売らないそうですね。

熊田 お金儲けではありませんから、そんなことをしたら罰が当たる。毎日が発見で、楽しくてたまりません。藤本 先生にとって、絵を描く意味って何でしょう。

熊田 命や自然の大切さを子どもたちに伝えたい。そしてお母さんたちにも知ってもらいたい。原画展に来た外国人は必ずこう言います。「生きていて！ 目が輝いている！」と。

藤本 実は正直言いますと、私は虫が苦手なほうで……。娘たちもしつかり親を見て育ち、虫が苦手になってしまっています。でも先生とお会いし虫の絵を見て、今までにない不思議な感じがするんです。孫には、ぜひこの感じ方を伝えたいと思います。

熊田 どの虫も懸命に生きています。その健気さ、かわいいもんですよ。

藤本 先生が描かれる虫は、とてもやさしい目をしていきますね。

熊田 目は必ず、最後に描くんです。虫になって無心に描く。

藤本 単なるリアリズムではなく、ファンタジーのようなものを感じるんです。それが、多くの人を惹きつけるのではないのでしょうか。

熊田 「ファーブル昆虫記」に、ガマガエルがオサムシを食べようと覗んでいる絵があるんです。このときは、自分が食べられてしまうような気がして、おそろしくて途中で絵が描けなくなってしまうんです。悩んだ結果、そこに、実際は出てくるはずのないミツバチを飛ばしたんです。一瞬だけ、ガマガエルが目を見つめる。藤本 その隙に逃げて命拾いをする。

熊田 虫が生きていくのは大変です。このときもう完全に、私はオサムシになっていた。初めて思いました。「私は虫である。虫は私である」と。

藤本 虫になってこそ、伝えられる命のメッセージなのでしょね。虫も一生懸命に生き、その役目をこなしている。そんなことに気づきます。

熊田 自然は美しいから美しいのではなく、愛するから美しいのです。藤本 そんな風に思うようになったのは、いつ頃のことですか。

熊田 70歳を過ぎてからでしょうね。

藤本 イタリア・ボローニャの国際絵本原画展で人賞された頃ですね。

熊田 出版社が勝手に展覧会に出してしまっただけ。それまでは多くの絵に見向きもなかった人たちが、外国

で評価されたら掌を返したようになって。あのときは癪に障りましたね。藤本 本当にいいものをわかる人が少ない世の中ですね。

熊田 人間に感性がなくなってしまったんです。今、一番悲しいのは、子どもたちにどんどん自然に対する感性がなくなっていることです。ある幼稚園では、子どもが草むらに入ると先生が怒るんださうですよ。

藤本 子どもたちが、自然を知らずに大人になってしまふ……。

熊田 こんな都会にも自然はたくさんあります。ちよつと窓を開ければ、アウトドアですよ。

藤本 虫の声も聞こえるし、鉢植えのお花にはハチがいっぱい！

熊田 小さい子には、体でさういう

80歳を過ぎて、どんどん目がよくなってきたんです





心と体で 感じる事が大事



自然を感じる力があります。

藤本 孫が2歳のときに、一緒にペランダの花の水遣りをしていたら、「お花がおいしいおいしいって言うてるね」と言うんです。誰もそんな風に教えていないのに。

熊田 感じる事が大切なんです。お母さんたちが、教えたり、押し付けたりはダメなんです。

藤本 先生は、どんな子ども時代を過ごされましたか。

熊田 体が弱くて、「10歳まで持たないだろう」と言われていました。ですから、家の庭で花や虫たちと遊んで過ごすことが多かったですね。父は勉強の「べ」の字も言わず、ぼくが虫と遊んだり、絵を描いていたりしたら笑顔でした。小学校3年生のときに、初めて「ファーブル昆虫記」を見せてくれたのも父でした。

藤本 お医者様だそうですね。

熊田 父はドイツで医学を学び、帰国後、横浜で開業医をしていました。家には西洋のものがたくさんあり、「ヨーロッパにはこんな本もあるよ」と見せられたのです。驚いたと同時に、「将来、絶対にこの虫たちの絵を描きたい」と、ぼくの「夢」になったのです。一日中花や虫たちと遊んでいても、偉い先生になれるんだと。**藤本** 出会うべくして出会ったといふのでしよう。

熊田 幼稚園のときの話です。ぼくは園庭の藤の花に飛んできたクマンバチの背中を触りたくて、ピョンピョンと飛び跳ねていたんです。黄色のピロロドのような毛に触れてみたかった。今ならすぐ「危ないからやめなさい」と言われそうですが、園長先生はじっと見守ってくれました。そしてようやく、ぼくがクマンバチの背中に触れたその瞬間、「ゴロちゃん（本名は五郎）、よかったね」と一緒に喜び、ほめてくださったのです。

藤本 初めて小さな命を感じた瞬間。指先に感じたその何かが、今の熊田さんをつくったともいえるでしょう。

熊田 幼稚園では大好きな絵をずっと描いていることができたけれど、小学校ではそうもいかず、学校がイヤでなかなか馴染めなかった。教室の隅っこで黙々と絵を描いていると友だちが寄ってきて「わあ、上手な絵。ぼくにも描いて」と言い出ししました。そしてらあつという間にズラ〜と列ができてしまったんです。忘れもしない「こいのぼり」の絵です。

藤本 みんなが欲しがってるんで、どれほどお上手だったのでしょうか。

熊田 普通は地面の上に家が建っていて、その脇にポールが立っていてこいのぼりが泳いでいる。でもぼくは、屋根とこいのぼりだけを描きました。みんなに「スゴイ！」と言わ

れ、輪の中に入れてもらえたんです。

藤本 五郎少年の画家への夢は、途中で消えることはなかったんですか。

熊田 上級になると体も丈夫になり、野球を覚えました。大好きな野球で食べていけるならと、中日ドラゴンズの前身である「金鯱軍」に籍を入れたんです。そして1週間目に父に見つかり、「おまえは絵を描いていればいい」と連れ戻されました。

藤本 お父様は、才能を見抜いていらっしやったのかもしれないね。その後は、どうなされたのですか。

熊田 神奈川県立工業高校の図案科を卒業、東京美術学校（現・東京藝術大学）在籍中に日本工房に入社し、化粧品品の広告をつくったり、外国向けのグラフィ誌「NIPPON」のレイアウトを担当したりしました。

藤本 日本工房という会社は、商業美術のはりださうですね。

熊田 当時の仕事はすべて今に生きていますが、商業主義に疑問を感じていたことも事実です。終戦後に勤めた会社でも化粧品のパスターなどを担当。一方で挿絵の仕事も続けていましたが、原色を使った派手な絵

に辟易し、「こんなもの、子どもに見せるものではない。絵本が嘘を教えるのはダメだ」とついに会社を辞めて、絵本作家になることにしたんです。

藤本 その頃はもう、ご家庭を持つていらっしやったんですか。

熊田 ええ。家内には相談せずに決めました。その後は営業もしないのでも、貧乏の連続。家族には苦勞をさせました。70歳で認められましたが、いまだに貧乏生活は変わりません。

藤本 何が幸せかといえば、好きなことをやり続けられること。それに、先生の絵は、子どもから大人まで、たくさんの人を幸せにしています。

熊田 ありがたいことに「余命いくばくもない」という人が展覧会に来て、「元気をいただきました」と涙を流しながら話すんです。その人は今もピンピンして活躍しています（笑）。

藤本 先生の絵から、生きるエネルギーというか、魂をいただくのかもしれないですね。

熊田 そんな話を聞くと、うれしくなりますね。楽しみにしていただく人がいるから、命続く限り。ですからほくには、

老後はありません。

藤本 来年の企画もありますので、ますますお元気でいてください。何か健康法があれば教えてください。

熊田 特別なことは何もしていません。強いていえば、輪切りにしたレモンを顔にのせ、ピタンピタンと、こやうやって思いきりはたくさんです。

藤本 ああ、先生、痛い痛い！

熊田 これくらいやらないとダメなんです。でも時々、頭がクラクラしちゃう（笑）。それともうひとつ大切なのは「ときめき」です。多くの場合は、描かなくなったからおしまいた。小さなものを愛おしみ、生かされているようなものです。

藤本 今日は楽しいお話をありがとうございました。描き続けてください。虫のお友だちにも、よろしくお伝えください。

対談を終えて

千佳慕という名にしたのは39歳のとき。ファンから手紙が届いたという。「五郎という名前でしたら、命を落とします。千人の偉人に慕われるように「千佳慕」という名にしませんか」。しかも、「改名したら3か月後には効果があらわれ、3年後には財宝を手に入れることができる」とあった。半信半疑だが、極貧生活から抜け出したいと改名。3か月後を心待ちにしたが、待つだけで結果があるわけがない。「なんだ、いんちきだったのか」と思ったが、「3年後」に期待し、そのまま今に至る。今ではすっかりその名が定着し、むしろ「五郎さん」に違和感すら覚える。が、「親からもらった名前。感謝してサインには「〇」の字を入れている」という。

「高齢でありながら、かくしゃくとされ、ちよつとした仕事にやさしさと気品があふれている。若かりし頃のお写真を拝見すると、それはそれは、驚くほどの美青年。「横浜で最初にパーマをかけた」というほど、昔からおしゃれで「ハイカラさん」だった。さぞかし女性におもてだったでしょうと尋ねると、「それが全くダメで」と相手を崩された。「あとかから仲間に、あの娘はおまえに気があったぞ」と言われたことは何度かあるという。先生、花や虫の気持ちはわかっても、女性の気持ちはわからないらしい（笑）。

（藤本裕子）

小さなものたちに 生かされているんです

阪神タイガースの大ファン
「藤本裕子」のハッピー姿で

